

[ 成果情報名 ] 一番茶芽出し肥への有機液肥施用による収量・品質の維持・向上

[ 要約 ] 一番茶芽出し肥として有機液肥を施用することで、減肥下においても収量を維持し、品質指標である全窒素の減少と、硬化を示す粗繊維の増加が緩やかとなり、品質を維持することができる。

[ キーワード ] チャ、液肥、芽出し肥、乗用型防除機

[ 担当 ] 総合農林試験場・東彼杵茶業支場

[ 連絡先 ] 電話 0957-46-0033

[ 区分 ] 茶部門

[ 分類 ] 指導

-----  
-

[ 背景・ねらい ]

茶の減肥栽培が進む中、より肥効を高め収量・品質を確保する上で液肥の施用は有効な手段である。しかし、液肥の点滴施用は配管施設の整備等が必要があり普及が進んでいない。そこで、現地で導入が進んでいる茶乗用型防除機を活用し、一番茶芽出し肥にのみ有機液肥を用いる効果的な施用方法について検討する。

[ 成果の内容・特徴 ]

1. 一番茶芽出し肥として有機液肥を施用することで、減肥下 (N-45kg/10a) であっても慣行施肥 (N-55kg/10a) と同等以上の収量を確保することができる (図 1)。
2. 一番茶芽出し肥としての有機液肥施用は、固形硫安による施肥と比べて初期成育は優れ、出開度の進行は緩やかに推移する (図 2)。
3. 一番茶芽出し肥として有機液肥を施用することで、生育による全窒素含量の減少は緩やかに推移し、固形硫安と比べて品質は向上する (図 3)。
4. 一番茶芽出し肥として有機液肥を施用することで、固形硫安と比べて、生育による粗繊維 (NDF) 含量の増加は緩やかに推移する (図 4)。

[ 成果の活用面・留意点 ]

1. 液肥の施用は茶乗用型防除機に散布用アタッチメントを装着して茶樹株元に施用する。
2. 慣行施肥 (年間窒素施用量 55kg/10a) に対し、年間窒素施用量 45kg/10a で実施した結果である。
3. 液肥は市販の有機液肥 (N:P:K:Mg = 10:5:6:1) を使用し、芽出し肥として 10a あたり窒素量 4.5kg を 3,000 ㎡ に希釈して散布する。

[ 具体的データ ]

液肥区は年間窒素施用量 45kg で芽出し肥として有機液肥を施用。  
 慣行区は年間窒素施用量 55kg で芽出し肥として固形硫安を施  
 各一番茶生葉収量は出開度 60%時点での推計値。  
 ( ) 内は慣行区(N-55kg/10a)を 100 とした時の指数。

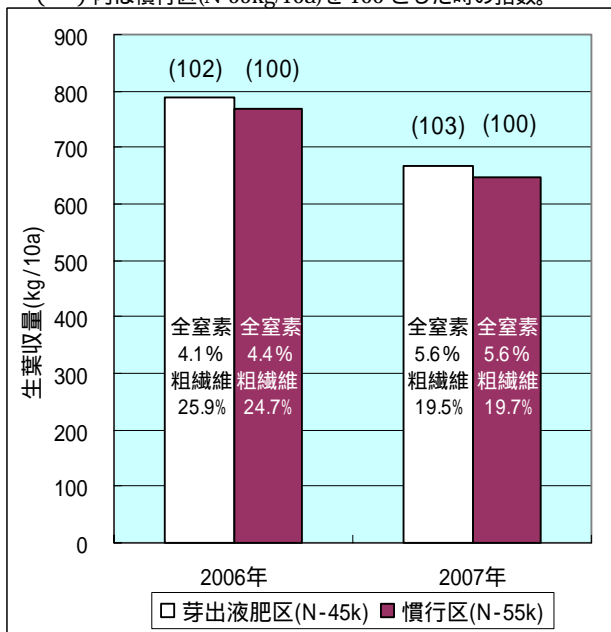


図1 芽出肥の違いによる一番茶生葉収量

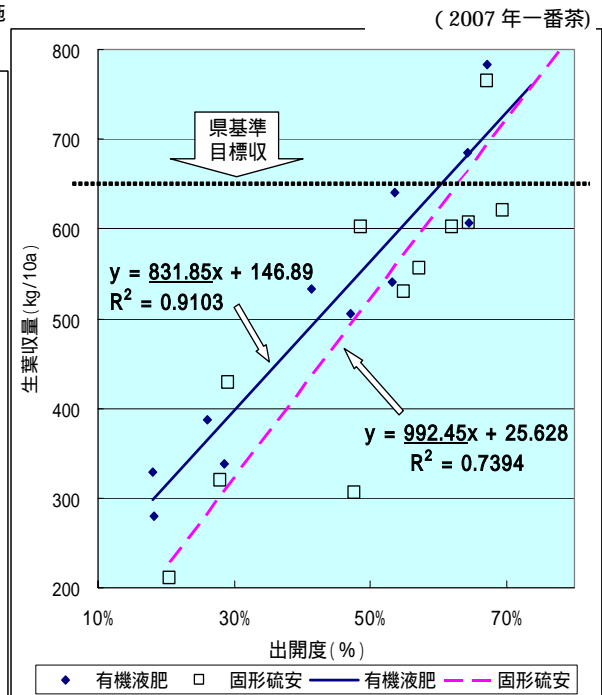


図2 芽出肥の違いと生葉収量と出開度の推移

年間窒素施用量 45kg 下で芽出し肥のみ有機液肥を施用。  
 (2007年一番茶)

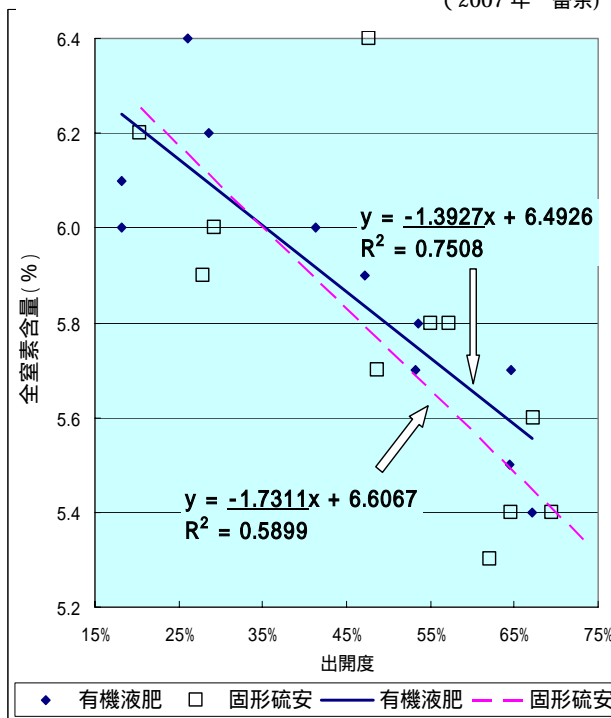


図3 芽出肥の違いと荒茶中の全窒素含量の推移

年間窒素施用量 45kg 下で芽出し肥のみ有機液肥を施用。  
 (2007年一番茶)

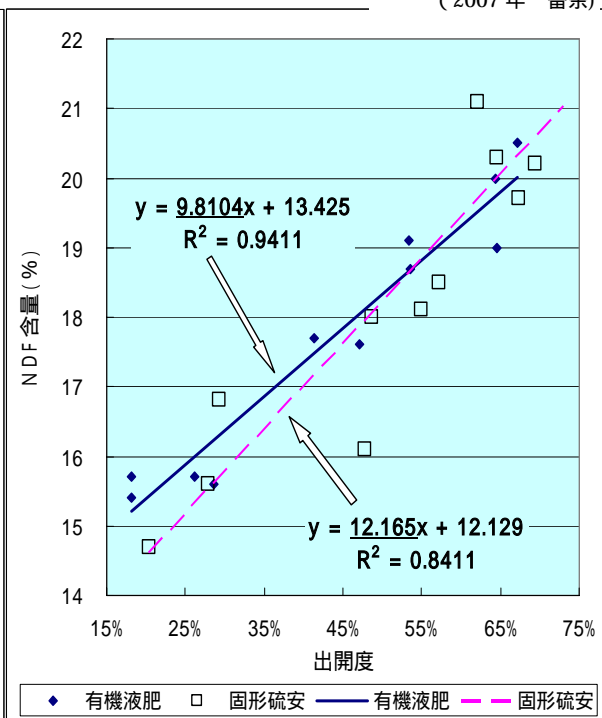


図4 芽出肥の違いと荒茶中の粗繊維 (NDF) 含量の推移

[その他]

研究課題名：飲む人・作る人に安心な茶生産技術の確立  
 研究期間：2006～2008年度

予算区分：県単  
 研究担当者：野田政之、本多利仁